広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第176集

移原遺跡発掘調査報告書

1999

財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター

例　言

1　本書は，1998年度に発掘調査を実施した緊急地方道整備事業に係る移原（うつのはら）遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，広島県加計土木事務所から委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。

3　遺跡の発掘調査は，松井和幸，橋坂久己，岡野克巳が担当した。

4　本書の執筆，編集は松井が行った。

5　本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。

　　ＳＢ：住居跡　　ＳＫ：土壙

6　遺物実測図の断面は，須恵器：黒ヌリ，その他：白ヌキである。

7　第１図は，建設省国土地理院発行の１：25,000地形図（八重）を使用した。

8　方位は，第２図，第３図は真北，他は国土座標第Ⅲ系北である。

9　遺物の法量のうち，復元したものについては（ ）付きで記した。

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　位置と環境 …… 2
Ⅲ　遺構と遺物 …… 4
Ⅳ　まとめ …… 10

Ⅰ　はじめに

移原遺跡は，緊急地方道整備事業にともなって発掘調査を実施した。

一般県道金屋壬生線は，高田郡美土里町と山県郡千代田町を結ぶ幹線道路である。中国自動車道千代田インターチェンジへアクセスする道路であり，美土里町から広島方面への通勤，周辺の工業団地への近道として利用されている。このため道路の改良工事が現在進められている。

同事業に伴う文化財の協議は，1997（平成９）年９月に，広島県加計土木事務所（以下「加計土木」という。）が千代田町教育委員会（以下「町教委」という。）へ，「文化財等の有無及び取扱いについて」を協議したことに始まる。町教委は，すぐに現地踏査，試掘調査を実施し，工事予定地内に「移原遺跡」（400㎡）が存在する旨を同年９月末に加計土木へ通知した。

遺跡の現状保存は困難であることから、加計土木は1997年10月に，文化庁長官あて，文化財保護法第57条の３に基づく，埋蔵文化財発掘の通知（「土木工事の通知」）を通知した。これを受けて広島県教育委員会（以下「県教委」という。）は加計土木に対し，移原遺跡は工事に先だって事前の発掘調査が必要である旨通知した。

工事の完成時期から考えて，町教委が発掘調査を行うことは不可能であることから，加計土木は，県教委へ発掘調査を依頼し，県教委は財団法人広島県埋蔵文化財調査センター（以下「センター」という。）が行うことが適当である旨通知した。

センターではこれを受けて，1998年３月12日付けで文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査の届出（文化財保護法第57条）を提出し，４月13日から５月15日まで発掘調査を実施した。

調査期間中の５月８日には，町教委主催の遺跡見学会が実施され，約50名の参加があった。

本書は，以上のような経緯で行われた移原遺跡の発掘調査の成果をまとめたものである。今後埋蔵文化財の研究資料として，また地域の歴史を明らかにしていく一助となれば幸いである。

発掘調査にあたっては，広島県加計土木事務所をはじめ，千代田町教育委員会，広島県教育委員会中世遺跡調査研究室，地元の方々の多大な御協力をいただいた。記して深く感謝いたします。

第１図　遺跡見学会

Ⅱ　位置と環境

移原遺跡は，山県郡千代田町大字川井字移原398-4，398-5，甲906に所在する。美土里町との境界に位置する火神城山（標高590ｍ）の南側斜面で，傾斜が緩くなった標高約340ｍ付近に位置する。火神山山頂には，毛利氏の本拠郡山城と吉川氏の本拠日山城とを結ぶ繋の城と考えられている火神山城跡が位置している[1]。

千代田町は，広島県の北西部に位置し，面積約172㎢の低丘陵性の盆地である。標高600～800ｍの山々が周囲を囲み，それらの山々に源を発する志路原川，冠川，出原川の３本の河川が，大朝町から流れてくる江の川（可愛川）本流と町内で合流し，三次市を経て日本海に流れている。

遺跡の所在する川井地区は，千代田盆地の北東端，美土里町と境を接する位置にある。前述３本の河川のうち出原川が江の川と合流する付近の左岸の丘陵上にある。この付近から下流約２㎞で土師ダムに至る。

千代田町は，古来から広島湾岸地域と山陰（石見）地域とを結ぶ交通の要衝として，重要な位置を占めており，山県郡内では遺跡の多い地域として知られている。そうした交通の要衝としての重要性は今日でも変わらず，中国自動車道と浜田自動車道の分岐点となっており，工業団地の建設など開発も多い。

移原遺跡周辺の遺跡を見ると，千代田工業団地建設にともなって墳墓群６基が発掘調査され，四隅突出型墳墓２基を含む墳墓群３基が現在県史跡として指定されている「歳ノ神（さいのかみ）墳墓群」，同じく工業団地の建設にともなって古墳及び９基の墳墓群が調査され，横穴式石室を有する古墳１基と弥生後期の台状墓２基が県史跡として指定されている「中出勝負峠（なかいでしょうぶだお）墳墓群」などがある[2]。

氏神工業団地の建設の際には，弥生時代から古墳時代にかけての箱式石棺３基，石蓋土壙墓１基からなる氏神正田遺跡が発掘調査されている[3]。

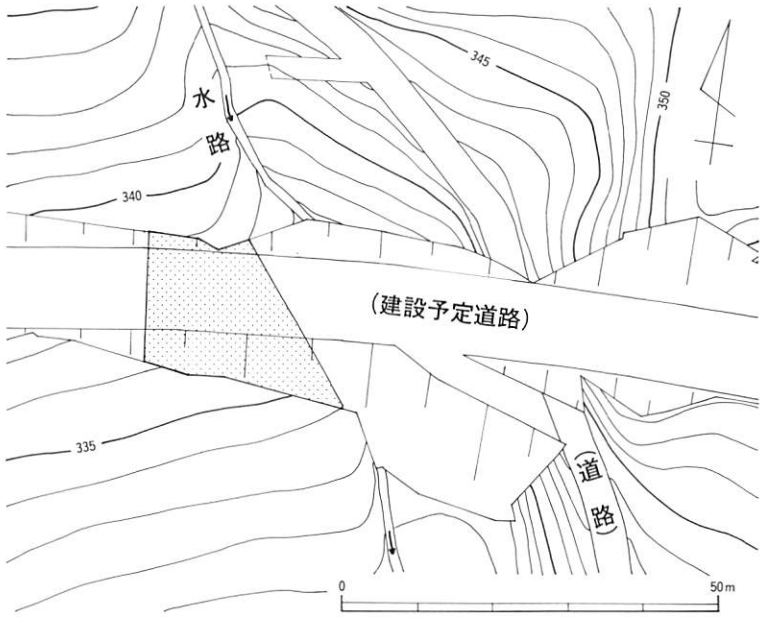
壬生の平野を望む川東の丘陵上には，川東古墳群，山根古墳群，下川東古墳群が分布し，江の川に面しては，川井の段原第１，２号古墳など多くの古墳の分布が知られている[4]。

ほ場整備事業（高伏谷地区）で，1984年に当センターが発掘調査を実施した川東の上日神谷（かみひがみだに）遺跡は，古墳時代後期の溝状遺構３本と住居状遺構１軒が検出されている[5]。本遺跡と内容がよく似ており，位置的にも近い。

（１）広島県教育委員会『広島県中世城館遺跡総合調査報告書』第１集　1993年
（２）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群』1986年
（３）千代田町教育委員会『氏神正田遺跡』　1984年
（４）広島県教育委員会『広島県遺跡地図Ⅲ（山県郡）』　1995年
（５）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上日神谷遺跡発掘調査報告書』　1985年

1　移原遺跡　　2　火神山城跡
3　火神谷古墳群　4　上日神谷遺跡
5　火神谷西第１号古墳
6　氏神正田遺跡

第２図　周辺遺跡分布図（１：25,000）

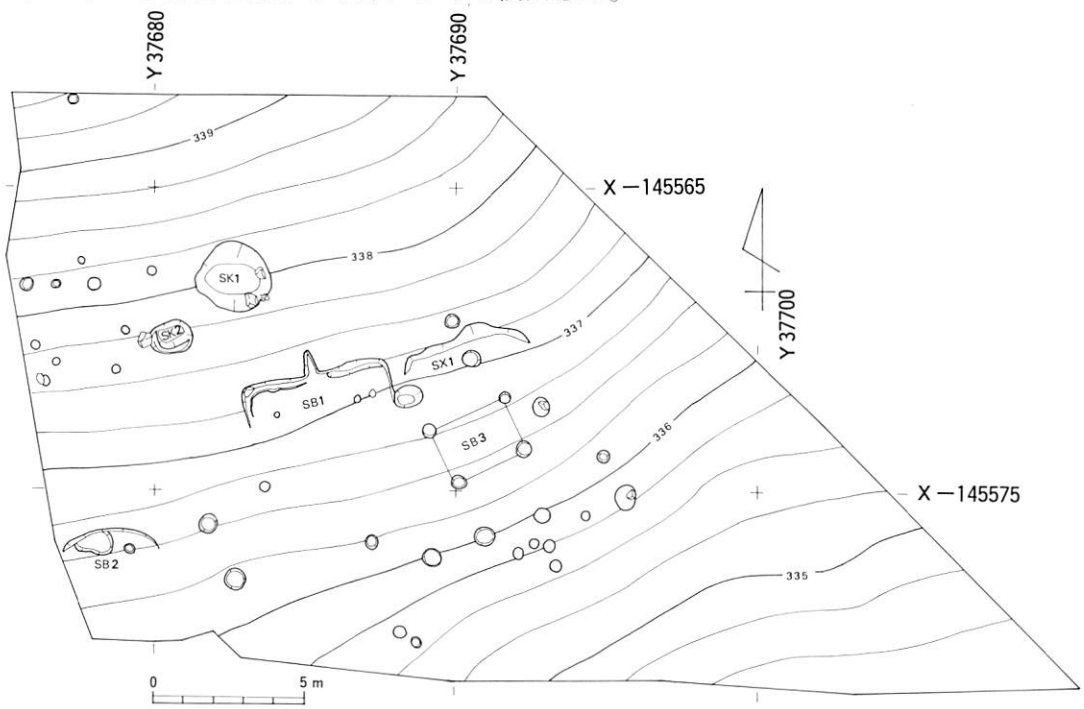


第３図　遺跡周辺地形図（１：1,000　アミ目が遺跡）

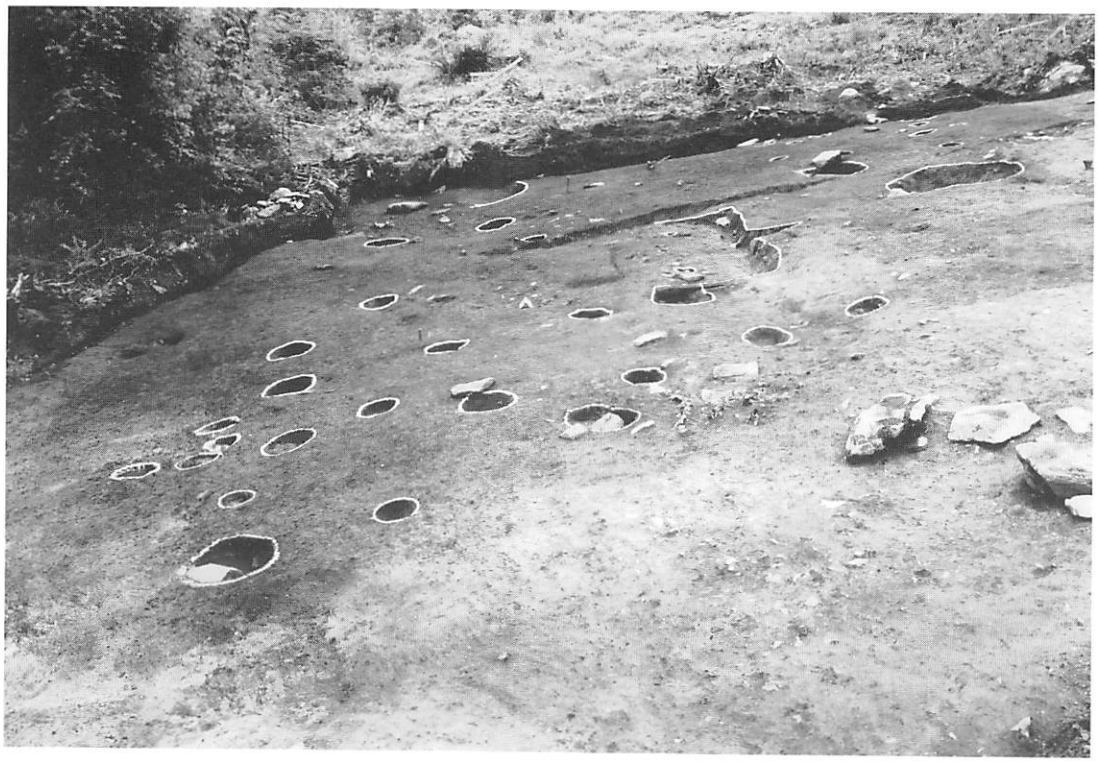
第４図　遺跡近景（東から）

Ⅲ　遺構と遺物

検出した遺構は，竪穴住居跡２軒（ＳＢ１，２），掘立柱建物跡１軒（ＳＢ３），土壙２基などである。いずれも斜面中腹から下方にかけて検出した。



第５図　遺構配置図（１：250）



第６図　遺跡近景（東から）

ＳＢ１（第７図）

遺跡のほぼ中央に位置する竪穴住居跡である。斜面下方部分は流失しており，東西約4.6ｍ，南北約1.6ｍ部分が「コ」字状に残っているのみであった。主柱穴は，東西に直径約20㎝，深さ50㎝程度の穴２基が確認された。位置から推測すると，本来は斜面下方にも２基存在し，４本柱建物であったと推定される。一部不明瞭な部分もあるが，排水溝が壁面下に掘られていた。

北側側壁のほぼ中央部で，幅約30㎝の竈の煙道部分を長さ約１ｍにわたって検出した。焚口部分はほとんど破壊されていたが，西側に立石が１個残っていたことから，本来は両方の焚口に石が立っていたと考えられる。また焚口付近の床面は強く焼土が分布していた。

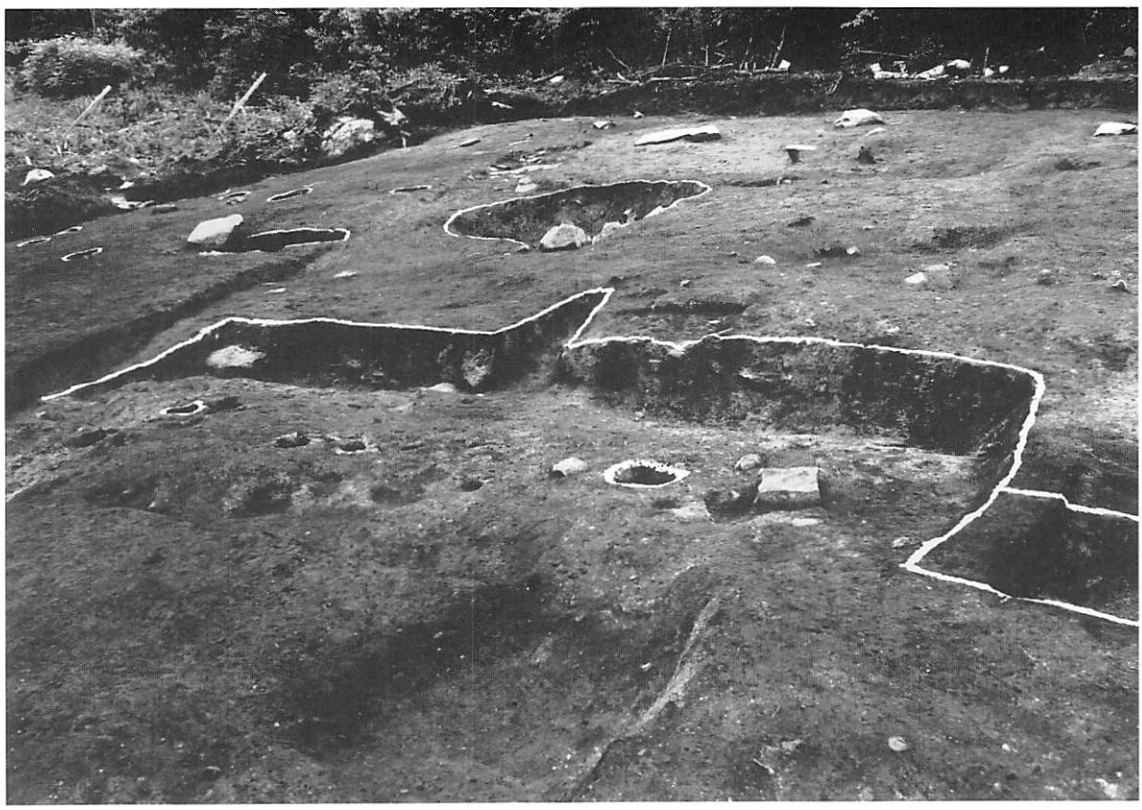
住居跡の時期は，古墳時代後期（６世紀後半から７世紀前半頃にかけて）と推定される。

ＳＢ１の西側から，残存部分で長さ約４ｍ，幅約２ｍの平坦に造成した段状の遺構（ＳＸ１）を検出した。柱穴などは検出できなかった。

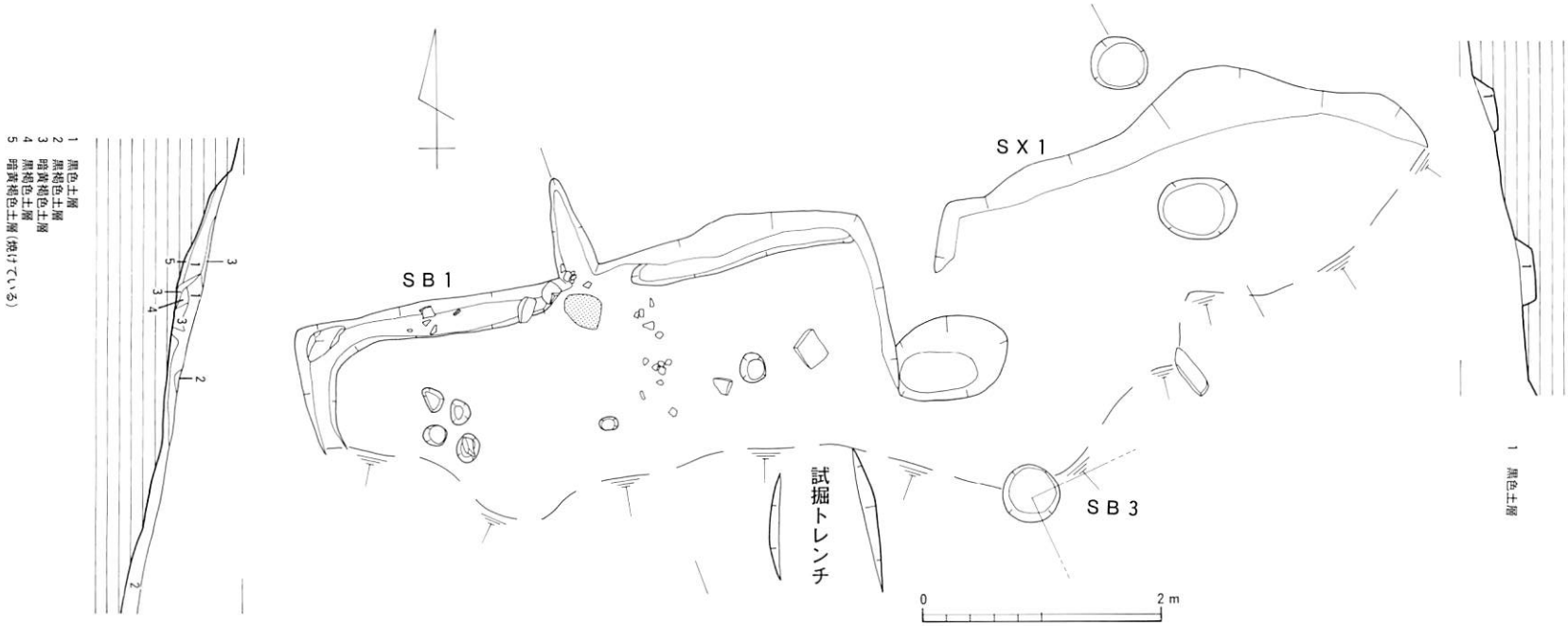
第15図４の甑は，口径（24）㎝，底径（11.8）㎝，高さ27.3㎝の土師器である。竈焚口付近から南側にかけての床面上に散乱した状態で出土した。焼成は良く，器面調整は丁寧である。第15図１は須恵器杯蓋口縁部小片である。第16図５は，復元できなかったが土師器甕胴部片である。

ＳＢ２（第５図）

調査区の南西隅で検出した竪穴住居跡状遺構である。主柱穴などは明瞭に確認できなかったが，壁面の掘込み状況などから，直径約3.5ｍ程度の円形床面を呈する竪穴住居跡と考えられる遺構である。出土遺物は無く，時期は不明である。

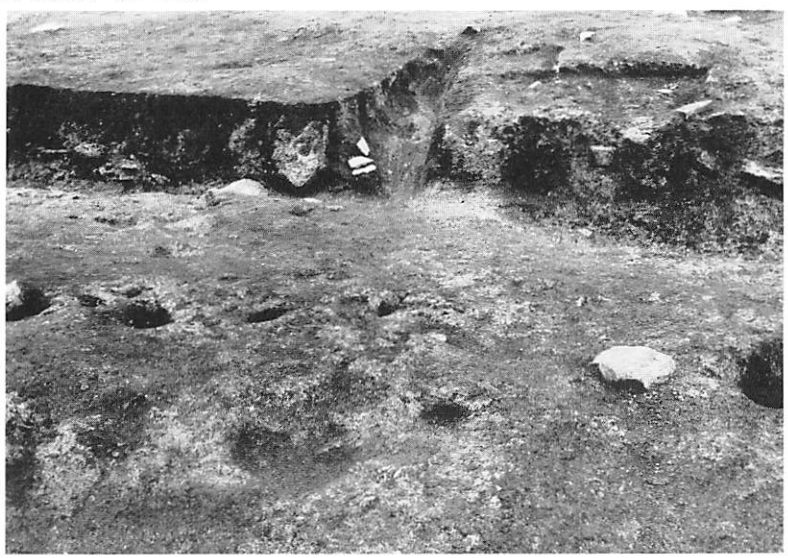


第７図　ＳＢ１周辺（南から）



第8図　ＳＢ１，ＳＸ１実測図（１：60）

第９図　ＳＢ１（南から）



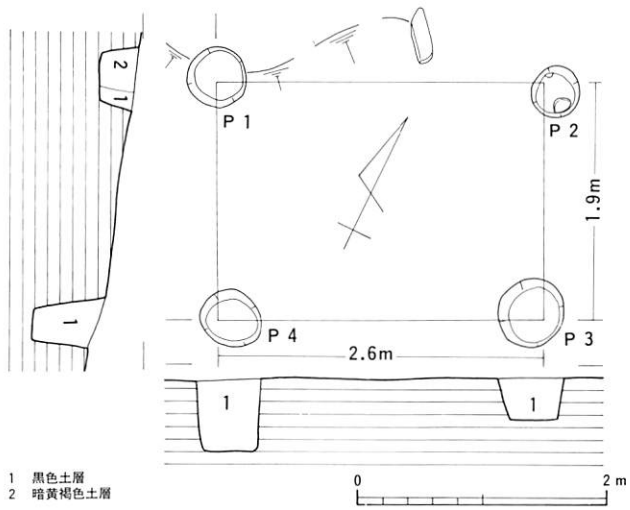
第10図　ＳＢ１竈（南から）

ＳＢ３（第15図）

ＳＢ１東側の段状遺構の２ｍ程度下斜面で検出した桁行１間（2.6ｍ）×梁行１間（1.9ｍ）の掘立柱建物跡である。柱掘方は，直径50㎝，深さ60㎝と大きい。時期は７世紀後半頃と考えられる。

第15図３は，南西隅の柱掘方埋土から出土した須恵器の杯身である。大きさは，口径(13.2)㎝,底径(9.8)㎝，高さ3.7ｍで，高台は無い。胎土は精緻，焼成は硬緻で淡青灰色を呈している。

なお，同様な規模の穴が，いくつか検出されたことから，他にも数棟の掘立柱建物跡が存在していたと推定される。



第11図　ＳＢ３実測図（１：60）

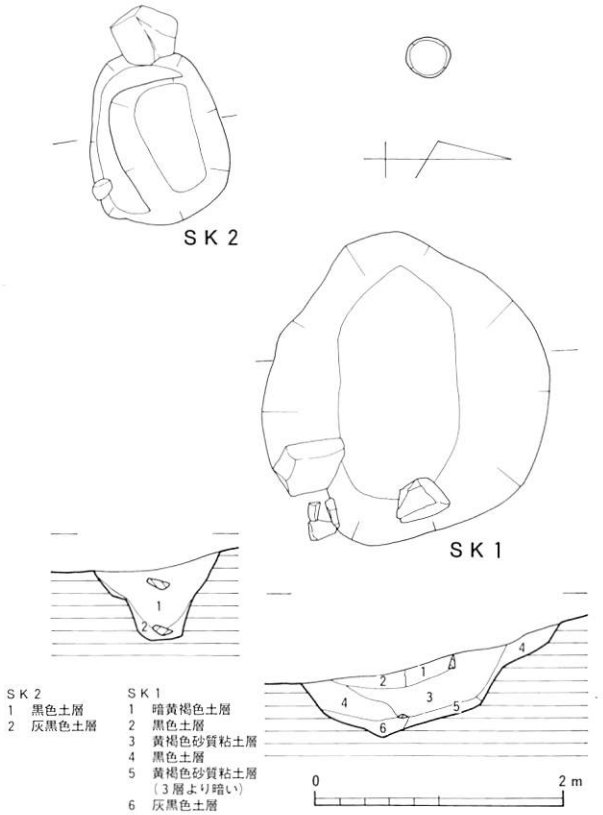
第12図　ＳＢ３（南から）

ＳＫ１（第13図）

ＳＢ１の北３ｍの斜面上部で検出した土壙である。大きさは，上部が約2.3ｍ×2.6ｍのほぼ円形，底部は１ｍ×1.8ｍの楕円形で，深さは約50㎝である。出土遺物はほとんど無く，時期は不明である。

ＳＫ２（第13図）

ＳＫ１の南西に隣接して存在する土壙である。大きさは，上部で東西1.4ｍ×南北1.1ｍ，底部で同90㎝×同46㎝の隅丸長方形状の土壙である。深さは，約60㎝で，西から南にかけては２段掘りとなっている。出土遺物は無く，時期は不明であるが，全体の形状から見て弥生時代から古墳時代前半期にかけての土壙墓である可能性が最も高い。



第13図　ＳＫ１，ＳＫ２実測図（１：60）

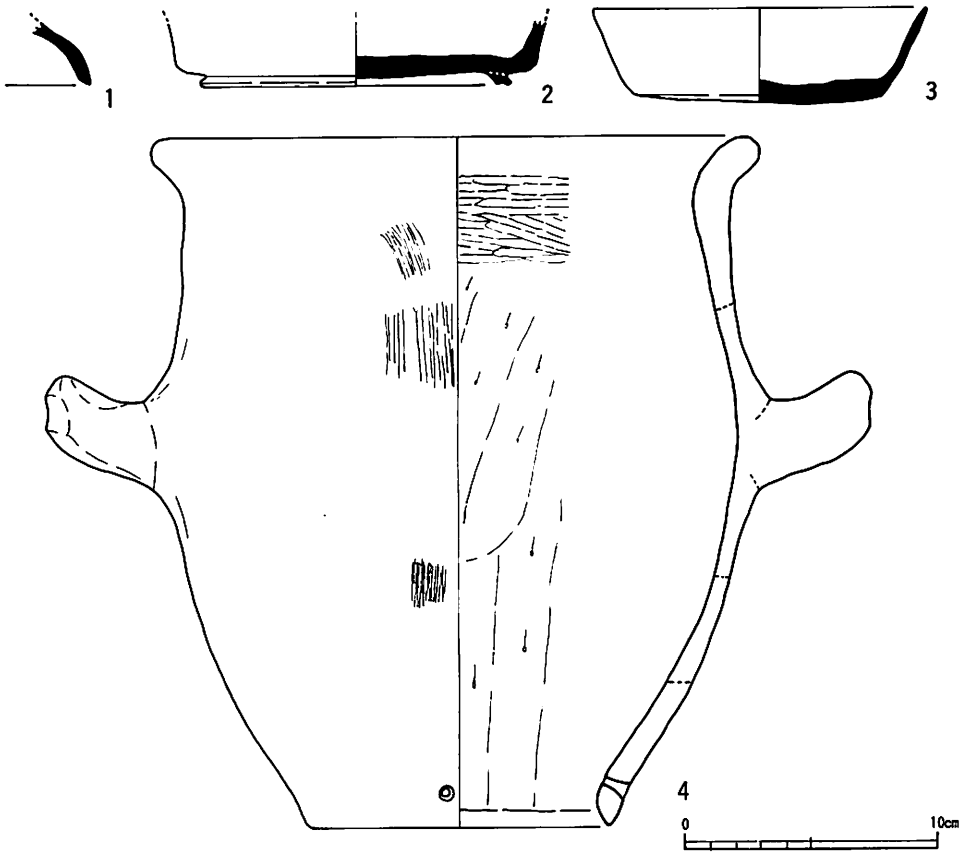
第14図　ＳＫ２（南から）

ＳＸ１（第８図）

ＳＢ１の東側にこれと隣接して形成されている段状の平坦面である。現状の範囲は4.2m×2.0mで，本来斜面下方部分に盛り土が存在したと推定されるが，全て流失していた。ＳＢ１との直接的関係は把握できなかったが，方向が一致していることなどから，同一時期の可能性が高い。なおＳＢ３を建てるための平坦部と考えることもできるが，平坦面との距離が約２ｍと距離があることから，直接関連するとは考えられない。ＳＢ３は，ＳＸ１の平坦面を一部利用して建てたために結果としてこのような配置になったのであろう。

その他の遺物

第15図２は，調査区外西側から出土した高台付須恵器杯片である。高台の径は（12.3）cmで，やや外側へふんばった貼付け高台である。胎土は精緻，焼成は硬緻で，青灰色を呈している。時期は第15図３とほぼ同様の７世紀後半頃と考えられる。



第15図　出土土器実測図（１：３）

第16図　出土土器写真

Ⅳ　まとめ

移原遺跡の発掘調査は，谷あいに形成された古墳時代後期の小規模な集落遺跡の実体を解明することが出来た点で意義があった。

遺跡は，現在の地形や試掘調査の結果などを参考にすると，東西には広がらない。ただ斜面の傾斜変換点部分に位置し，南側方向に斜面は緩くなっていることから，集落の中心は南斜面に向けて形成されている可能性はある。検出された遺構，遺物も古墳時代から古代にかけてのものであり，集落としては規模はあまり大きくなかったが，長期間に亘る可能性はある。

川東の上日神谷遺跡は，同様な規模，時代の遺跡である。遺跡は，移原遺跡の西約１㎞に位置し，火神城山の西南麓に作られた狭長な谷の緩傾斜面上に立地していた。自然の小河川とＳＤ１を含め３本の溝と住居状遺構（ＳＢ４）１軒が検出されている。遺跡の時期は，ＳＤ３の埋土内出土の一括して投棄された土器から，古墳時代後期（６世紀末から７世紀末前半）頃と考えられている。移原遺跡の住居の時期とほぼ一致する。

先述のように，移原遺跡が立地する丘陵の南端や西端には，川東古墳群，山根古墳群など多くの古墳群が存在する。こうした多くの古墳群が成立した背景は，古墳時代に入ると丘陵の狭い谷筋まで開発されるようになり，そこに集落が形成されるようになった結果であると考えられる。

報告書抄録

ふりがな	うつのばらいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	移原遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第176集
編著者名	松井和幸
編集機関	財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目8-49　TEL082-295-5751
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
移原遺跡 (うつのばらいせき)	広島県山県郡(やまがたぐん) 千代田町(ちよだちょう)川井(かわい) 字移原(うつのばら) 398-4 外	34366	390	34度 41分 18秒	132度 34分 43秒	19980413 ～ 19980515	400	緊急地方道 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
移原遺跡	集落跡	古墳時代 飛鳥時代	竪穴住居跡　2軒 掘立柱建物跡　1棟 土壙　2基 性格不明の遺構　1基	土師器 須恵器	

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第176集

移原遺跡発掘調査報告書

発行日　1999（平成11）年3月31日

編集・発行　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL(082)295-5751

印刷所　㈱エル・コーポレーション